

## 〔特集〕 子どもの学校生活から垣間見える家族

## はじめに

編集委員

大谷尚子

学校というところは、教育を目的とする組織であり、そこに通う子どもは「教育の対象」とされる。そして当然のことではあるが、学校で働く教職員の任務は「教育」を行うことである。その「教育」と言っても、学校の教職員は子どもの教育をするのであって、その保護者を教育したり、地域住民の教育を担ったり、ましてや、その責任を負う職種ではない。しかしながら、学校に居て子どもと学校生活を共に過ごす教職員は、学校に居る子どもたちの姿を通して、一人ひとりの子どもの属する家庭での生活や家族の機能を知ることになったり、地域の状況をうかがい知ることが容易である。そして、その子どもの「教育」を遂行していこうとすると、家庭の問題・家族の問題に行き着くことが多い。そのため、学校教職員は子どもの「教育」の為に、子どもへの教育的支援を進めていく上で、家族や地域の問題にかかわらざるをえない。

一方、これまで病人のケアを中心にかかわることを看護としてきたが、病人を抱える家族のもつ機能あるいはこの機能を高める援助活動を看護の中の一分野として位置付ける概念が発達し、世界的には1970年代にそれを家族看護学として提唱されるようになってきた(杉下<sup>1)</sup>)。

そして、本学会も「家族を(家族構成員が相互に影響しあいつの)単位とする枠組みで、ライフステージの全ての段階での健康障害時のみならず、健康の維持増進及びリハビリテーションやターミナルケアに至るまでのケアに有効な方法を、人々の生理機能の実証的理解や家族機能の理解を基盤に、広く病院や在宅の場で開発することを主な目的」(本学会設立趣意書から)に1994年に設立された。ここでは、

「ライフステージの全ての段階で」、「健康障害時のみならず」とあるので、当然、学校に通う子どもたちのことがらも対象となる。しかしこれまでなされてきた学校看護学領域の研究の中には、学校に通う子どもたちを対象とするものは数が少なく、「今後は、教育期を対象とした研究の発展が必要」であり、「健康的なライフスタイル獲得にあたって学童期の及ぼす影響の重要性を考慮すると、『健康群』の家族に関する研究の発展が望まれる」(浅野<sup>2)</sup>)とされている。

そこで、今回の特集は、学校に通う「普通の」すなわち「健康」とされる子どもたちの実態を明らかにしようとするものである。そして学校という場で、子どもを通して垣間見える家族の実像に迫っていきたい。そのことにより、家族のもつセルフケア機能の向上をめざして家族へのかかわりを実践し、その実践を通してケア理論を構築しようとする「家族看護学」の発展の一助としたい。

上記の趣旨により、執筆者には次のような立場の方に依頼した。

中川裕子氏は養護教諭という立場から、小学校や中学校の保健室で子どもたちに向き合い、その保護者にかかわってきた方である。保健室に居て垣間見た家族について明らかにしていただく。

岡崎勝氏は体育を専門とする教師であるが、小学校での学級担任としての体験をもとに「子ども」の実像に迫っていただき、そこから見えてきた家族を語っていただく。

生越達氏は不登校の子どもたちと「専門家としてではない」関係で長期にかかわる体験をもっていたが、近年発足したスクールカウンセラーという制度

の中で、中学校の相談室に勤務することになった方である。学校の中の相談室という場での実践とそこから垣間見えてきた家族について述べていただく。

門脇厚司氏は、教育社会学という立場から今日の学校場面で示す子どもたちの現象を、社会的に、すなわち学校内の問題に限定せずに、家族や地域まで含めて問題を解析され、問題提起をしている方である。

お忙しい中でのご執筆に感謝を申し上げたい。

#### 文 献

- 1) 杉下知子：家族看護学へ期待するもの，家族看護学研究，第1巻第1号，2-7，1995
- 2) 浅野みどり，立岡弓子，杵淵恵美子，他：1993年以降の母子看護領域における家族看護学研究の動向，家族看護学研究，第1巻第1号，10-12，2000